

特集

東洋大学ゆかりの 文人の系譜



昭和初期の
旧図書館閲覧風景

- 特別寄稿：読み手から書き手へ
- 内田康夫氏のこと
- 東洋大学図書館所蔵古典文庫旧蔵書について
- 世界の図書館探訪：フィレンツェの図書館

秋と言うとよく取りざたされる「読書の秋」。図書館を利用して多くの読物に出会ってほしいものです。読物の作者には東洋大学にゆかりのある方々があります。今回は葛西善蔵氏、坂口安吾氏、野溝七生子氏、内田康夫氏、長嶋有氏の5名を紹介します。気になる本が見つかったら来館してください!!

葛西 善蔵 (カサイ ゼンゾウ)

明治20年(1887)青森県弘前市生まれ。15歳で単身上京後帰郷。明治38年(1905)再び上京、哲学館大学(現東洋大学)聴講生となる。大正元年、広津和郎や谷崎精二らと同人誌「奇蹟」を創刊し、葛西歌棄の名で処女作『哀しき父』を発表した。その後の作品として『雪をんな』、『贗者』、『子をつれて』、『おせい』、『権の若葉』、『湖畔手記』などがある。

坂口 安吾 (サカグチ アンゴ)

明治39年(1906)新潟県新潟市生まれ。大正15年(1926)東洋大学入学、大正19年(1930)卒業。『青い馬』2号掲載「風博士」を牧野信一氏に激賞され一躍文壇デビュー。『吹雪物語』、『古都』、『ただの文学』、『日本文化私観』その他多数の作品を残している。

野溝七生子 (ノミゾ ナオコ)

明治30年(1897)兵庫県姫路市生まれ。大正10年(1921)東洋大学入学、大正13年(1924)卒業。昭和26年(1951)東洋大学文学部専任講師、昭和27年(1952)助教授、昭和31年(1956)教授になる。昭和42年(1967)定年退職。大正13年(1924)「福岡日日新聞」懸賞小説に『山梔](くちなし)が入賞しデビュー。その後数々の短篇小说を生み出した。代表作は『女獣心理』、『南天屋敷』、『月影』など。

内田 康夫 (ウチダ ヤスオ)

昭和9年(1934)東京都北区生まれ。コピーライター、テレビCM制作会社経営を経て、昭和55年(1980)『死者の木霊』でデビューした。昭和57年(1982)からは作家業に専念。作品ではフリーライター・浅見光彦を主人公とする作品に人気がある。作品は『本因坊殺人事件』、『後鳥羽伝説殺人事件』、『明日香の皇子』など多数。平成14年(2002)に北区内田康夫ミステリー文学賞が設立された。

4ページに内田康夫氏からの寄稿文を掲載。5ページに本学文学部の中山尚夫教授が内田康夫氏について紹介します。

長嶋 有 (ナガシマ ユウ)

昭和47年(1972)埼玉県生まれ。平成2年(1990)東洋大学入学、平成7年(1995)卒業。平成13年(2001)『サイドカーに犬』で文学界新人賞受賞、平成14年(2002)『猛スピードで母は』で芥川賞を受賞。また、コラムニスト・ブルボン小林、俳人・長嶋肩甲としても執筆活動をしている。



旧白山図書館



その周りにあった花ニラ(観想の華)(昭和3年に応援歌「観想の華」が作られた。)

所蔵一覧(本学所蔵の一部を紹介)

●葛西善蔵

書名	所蔵館	請求記号
葛西善蔵	白山	910.26 : S-16
	朝霞	910.268 : S-12
近代小説のなかの家族	白山	913.6 : T-11
	朝霞	913.68 : Y

●坂口安吾

書名	所蔵館	請求記号
定本坂口安吾全集	白山	913.6 : SH-3
	朝霞	913.6 : SA-3
	工学部	913.6 : SH-3
詩と真実	白山	080 : C
	朝霞	104 : C
	工学部	108 : C
驚くころ	白山	080 : C
	朝霞	104 : C
	工学部	108 : C
悪の哲学	白山	080 : C
	朝霞	104 : C
	工学部	108 : C
悪いやつ物語	朝霞	908.3 : C
	工学部	908.3 : C
おかしい話	朝霞	908.3 : C
	工学部	908.3 : C
怠けものの話	朝霞	908.3 : C
	工学部	908.3 : C
変身ものがたり	朝霞	908.3 : C
	工学部	908.3 : C
吹雪物語	白山	KB : サ
	朝霞	913.6 : SA-3
交錯する軌跡： 注釈昭和の短編小説	白山	913.68 : K
	朝霞	913.68 : K-3

●野溝七生子

書名	所蔵館	請求記号
分身	白山	908 : S-21
	朝霞	908 : S-13
	工学部	908 : S-3
野溝七生子作品集	白山	913.6 : NN
	朝霞	913.68 : NN
	工学部	913.6 : NN

●長嶋 有

書名	所蔵館	請求記号
猛スピードで母は	白山	913.6 : NY22
	朝霞	01 : 611
	工学部	913.6 : NY21
	板倉	02 : 9
タンノイのエジンバラ	白山	03 : 16、913.6 : NY22
	朝霞	913.6 : NY22
	工学部	913.6 : NY21

●内田康夫

書名	所蔵館	請求記号
しまなみ幻想	朝霞	913.6 : UY14
	工学部	15-1
はちまん	朝霞	01 : 166、01 : 167
	工学部	12-114、12-115
黄金の石橋	朝霞	913.6 : UY14
	工学部	13-13
歌わない笛	朝霞	913.6 : UY-2
	工学部	12-93
貴賓室の怪人	朝霞	00 : 159
	工学部	12-110
軽井沢殺人事件	朝霞	02 : 246
	工学部	3-154
鯨の哭(な)く海	朝霞	01 : 195
	工学部	13-111
死者の木霊	朝霞	913.6 : UY-2
	工学部	12-84
中央構造帯	白山	02 : 263
	朝霞	913.6 : UY14
	工学部	14-177
日蓮伝説殺人事件	朝霞	913.6 : UY-2
	工学部	13-7
平城山を越えた女	朝霞	913.6 : UY-2
	工学部	12-85
名探偵浅見光彦の ニッポン不思議(ミステリアス)紀行	白山	01 : 430
	工学部	14-188
贄門島	朝霞	913.6 : UY14
	工学部	15-29、15-30
隠岐伝説殺人事件	工学部	13-8、3-290、3-146
歌枕殺人事件	工学部	3-148、12-102
菊池伝説殺人事件	工学部	3-147、13-6
蜃気楼	工学部	12-89
鄙の記憶	工学部	10-18、12-109
秋田殺人事件	工学部	12-90
北国街道殺人事件	朝霞	02 : 245

※請求記号の3段目はキャンパスにより異なる場合があります。OPACで検索し、配架場所等確認してください。

参考文献

書名	所蔵館	請求記号
葛西善蔵	白山	910.26 : S-16
	朝霞	910.268 : S-12
坂口安吾	白山	910.26 : S-16
	朝霞	910.268 : S-12
野溝七生子作品集	白山	913.6 : NN
	朝霞	913.68 : NN
	工学部	913.6 : NN
タンノイのエジンバラ	白山	03 : 16
	朝霞	913.6 : NY22
	工学部	913.6 : NY21

特別寄稿

読み手から書き手へ

内田 康夫

どうすれば作家になれるか？——という質問をよく受ける。この場合の「作家」とはプロの小説書きを指すのだろうけれど、小説でメシを食えるようになるかどうかはともかくとして、とりあえず小説を書かなければ物事は始まらない。小説を書くために絶対に必要不可欠なことは、小説を読むことである。小説を読んだことがなくて、小説を書きたいと考える人はたぶんいないだろうから、こんなことは言わずもがなだが、小説を書きたいという意志は、小説を読む日常から、自然発生的に生まれてくるものなのだ。

小説の読み手には二つのタイプがある。一つは「よき読者」のままで終わるタイプ。通勤通学の乗り物の中や寝る前に必ず読書をしなければ気がすまない。このタイプの人は作家業を営む者や出版社にとっては神様みたいなものだ。しかもこの人たちは読む量は多いけれど、決して自分が小説を書こうなどという愚かな(?)ことは考えたりしない。

読み手のままでいることに飽き足らず、自ら小説を書こうと考える人がもう一つのタイプである。くどいようだけれど、この人たちもまず読書からスタートしている。大なり小なり読書習慣がなければ、小説を書くことは難しい。

小説を書こうとする動機にも、大まかに分けると二つのタイプがある。一つは作家という職業に関心がある「野心家」タイプ。子供の頃、「おとなになったら何になりたい?」と聞かれて「小説家」と答える(こんなことを言う子は少数で、よほどの変わり者だ。大抵は「プロ野球の選手」「サッカー選手」「先生」「看護師」「電車の運転手」などを挙げる)ような単純なのから、作家は儲かるらしいという不純派まである。

もう一つは小説を書く作業そのものに関心がある「純粋派」タイプ。僕はどちらかといっておっこのグループに属するのだが、スタートのきっかけは、あまり純粋と言えるようなものではなかった。既成作家の書く小説が面白くなく、この程度のもなら俺にも書けるといふ、思い上がりもはなはだしい動機によっている。

しかし、小説に限らず、絵画など芸術性のある職業に志す人間は誰も、多少はこの性向の持ち主だ。たとえ思い上がりであろうと錯覚であろうと、俺のほうがほかのやつより上手いと思わなければ、人様の評価を仰ぐような鉄面皮にはなりきれない。スポーツや囲碁将棋などと異なり、幸いなことに、小説という表現方法は、よほどの落差があればともかく、ほかの人の書いたものとどちらが上手いか、にわかに判定がつかない。同じ表現芸術でも、音楽や絵画のほうがまだしも客観的に優劣が見分けやすい。小説の場

合は、他人が何を言おうと、本人が自分のほうが上手いと思っ込んでいけば、とりあえず成立する世界である。

ただし、職業として成立するか、小説でメシが食えるかどうかとなると、かなりきびしい世界ではある。ほかの職業に就きながら小説を書く——つまり「二足の草鞋」を履くか、あるいは「髪結いの亭主」を決め込むならともかく、小説一筋で生活してゆくのはなかなか大変だ。

「小説家」「作家」の肩書は、それで生活できているかどうかによって許される。その点、同じ文芸の仲間のように、「俳人」「詩人」などと根本的に違う。優れた俳句や詩を発表していれば、たとえその道でメシを食えなくても、(あるいはむしろ清貧であるほうが)「俳人」「詩人」として認められ尊敬もされるが、小説家はそうはいかない。「私は小説を書いています」というだけでは「小説家」ではない。同人雑誌や投稿誌にいくら優れた(と本人が思っている)作品が掲載されても、「小説家」を借称するわけにいかない。小説が売れて収入になって初めて、自他ともに「小説家」と呼ぶことが許される。

とはいえ売れる小説が良質とは限らない。有体にいえば、作品の質が必ずしも販売部数に反映されないことがある。だからこそ「あいつより俺のほうが上手い」という批判や不満が生じる余地があるわけだ。そう思うためには、ひとの書いた小説を数多く読む必要がある。小説を書きたければまず小説を読めというのはこの理由による。ただし、既成作家の一人である僕としては、読書家は読書家のままで終わってくれたほうがありがたい。



暑さが戻った9月初旬の土曜日、作家内田康夫氏の高校・大学以来の親友で、私にとっても親しい先輩である池田謙三さんを無理矢理誘って、軽井沢の塩沢湖に近い「浅見光彦倶楽部」クラブハウスを訪れた。この「コスモス」原稿執筆依頼を受け、氏ご本人に許可を得ることと正確な情報を聞くことが目的であった。十数年来、年に何度かお会いしてはいるものの、ご自身のことについてあらたまってお話をうかがったことの記憶がなかったからである。氏は約束時間よりやや早く、相変わらずのダンディーないでたちで、「やあ、早かったね」とご登場。近況や昔話、亡くなられた吉田幸一先生のことなど、3人でとめどもなく話しているうちに、此所には内田康夫あるいは浅見光彦ファンが三々五々やってくる。聞けば、休日にはかなり多くのファンが此所を訪れるとのこと。氏はできる限りそうした人々との交流のため時間を割いているという。脇から見てみると、一人一人とこやかに会話を交わし、記念写真に納まっている。その様子はいかにも誠実で、あの浅見光彦を彷彿とさせる。

さて、1980年に『死者の木霊』でミステリー作家としてデビュー、3作目の『後鳥羽伝説殺人事件』で人気作家としての地位を確立、探偵浅見光彦・信濃のコロンボ竹村岩男警部・警視庁の名探偵岡部和雄警部といった有名主人公の生みの親である内田康夫氏は、自らの生い立ちについて、『僕は東京都北区西ケ原一団子の平塚亭から三百メートルほど飛鳥山寄りのところで生まれた。戦時中まで東京市滝野川区西ケ原八八七番地だったのだが、学童疎開で静岡県沼津市に行っているあいだに、滝野川区と赤羽区が合併して「北区」となり、その辺りの住所は「東京都北区西ケ原二丁目」になった。その直後に震災に遭ったから、何番地だったか記憶にない。父は町医者で、そこそこの暮らしをしていた。震災がなければ兄が跡を継いで、僕は…次男坊はやっぱり追い出されて、しがないサラリーマンか食えない物書きにでもなっていただろう。戦後何年かして西ケ原に舞い戻ったときには三丁目に住んだ。「浅見家」のすぐ近くである。三十年後に、その街やそこに住む人々を小説に書くとは思わなかった。災難はいつどこから襲うか分からないものだ。』（『我流ミステリーの美学 内田康夫自作解説第1集』<1997年6月25日、中央公論社刊>のP289～290）と述べている。北区西ケ原三丁目に居住していた氏は、ご近所で日本の古典文学資料（古典文庫）出版を独力で続けておられた東洋大学文学部教授吉田幸一先生宅に、出入りするようになった。少年期から青年期へ移行す

る青春時代、先生の筋の通った生き方や学問に対する誠実な姿勢に触れ、また、夫人のお人柄から生まれる開放的かつ家族的雰囲気吉田家で送った日々は、とても貴重で楽しく、なにもものにも替えがたい時であり、物書きになった現在でも、当時先生ご夫妻また吉田家から与えられた多くの直接的影響は貴重な財産になっているという。

そうしたいきさつもあって、内田作品には吉田先生のご家族がよく登場する。代表的な例としては、浅見光彦の母堂一雪江未亡人—は先生の奥様、浅見家のお手伝い—須美ちゃん—は先生のご長女が、それぞれ実名でモデルとして登場している。先生ご自身も和泉式部伝説を背景とした『十三の墓標』（1987年前半に「小説推理」に連載、同年7月双葉社から単行本として刊行）中に、和泉式部を研究する大学教授「吉川弘一」として登場、事件の解決に一役買っている。氏は《恩師の名前をモロに出すと叱られそうですから言いませんが、「吉川弘一」という教授の名前とよく似た、和泉式部研究の第一人者のご紹介すれば、きっとご存じの方も多と思います。ご存じない方には、「浅見光彦の母親—雪江さん—のご主人」とお教えしましょう。作中では雪江未亡人と書いていますが、じつはご主人はご健在なのです。ご健在どころか、八十歳を超える現在もなお、毎日原稿用紙と向かい合って、論文の執筆に精を出しておられる。推理小説の世界では島田一男氏がわれわれを圧倒するほどの執筆量をこなしておられますが、怠け癖の強い僕などは、叱咤激励される想いがします。『十三の墓標』に象徴されるように、恩師のお宅での会話がヒントになって生まれた作品は少なくありません。『隠岐伝説殺人事件』もそうです。後鳥羽上皇のことや源氏物語絵巻に関する知識は、すべて恩師のお宅で取材しました。『赤い雲伝説殺人事件』で事件の発端となった「赤い雲の絵」は、雪江夫人が絵画教室のスケッチ旅行で描いたもので、小説の中ではいかにも魅力的な傑作であるかのごとくに表現しましたが、実物は正直なところ、ケツタイな作品です。また、雪江夫人の出身は上野谷中付近で、「あの辺りには、昔の東京が残っていて、面白いわよ」と推薦されたのがきっかけとなって『上野谷中殺人事件』が誕生しました。》（前掲『我流ミステリーの美学』P227～228）と、内田作品と吉田家との深いつながりについて詳しく述べている。『十三の墓標』執筆にあたって、和泉式部についてほぼ丸一日、先生宅で講義を受けたという、知る人ぞ知るエピソードは、生まじめに多くの資料の説明をされる先生と、その前で神妙な顔で取材する氏の様子を思い浮かばせ、何とも微笑ましい。

また同作刊行後、先生ご自身が「学問書ではないけれど」と、テレ臭そうに断りながら人々に贈られたという後日談も、教え子を想うシャイな先生の一面が垣間見られ、内田氏をおおいに感激させた。

閑寂な緑に囲まれた近くのTea Salon「軽井沢の芽衣」でのランチを挟んだ談笑の時間は、お二人の先輩方に十分な満足をもたらしたようであったし、私にとってはようやく実現した内田サロンでのひとときであった。

東洋大学図書館所蔵 古典文庫旧蔵書について



故吉田幸一名誉教授

本年1月9日に他界された本学名誉教授吉田幸一先生は、一流の国文学者であると同時に、秀でた古典籍蒐集家でもあった。先生の素晴らしいところは、ご自身のご研究また国文学界のために、独力で膨大な量の古典籍を集められ、それらをことごとく、ご研究また資料提供に活用された点にあると思っている。そして先生はそ

の貴重な古典籍の多くを本学図書館に残してくださった。

10年ほど以前であったと思う。白山キャンパス再開に伴う新図書館建設に際し、記念の『東洋大学所蔵資料図録』作成を企画した、当時の図書館事務部長S氏からその計画を聞いたことがある。しばらくして私が吉田先生のお宅へうかがい、何かの話をしているときに、偶然その話題になった。先生はやや間を置いて、「本学図書館の和書に関して言えば、奈良絵の類はあるけれど、そのほかは図録を作るには質量ともに貧弱すぎますね」と感想を述べられた。その後また別の用件でお宅にうかがうと、突然、先生が書庫からご所蔵の古写本数点を出してこられ、見せてくださった。重要文化財の『狭衣(さころも)』をはじめとして、鎌倉・室町・江戸初期に書写された本当に貴重なものばかりで、手にとることもはばかれるほどの緊張の中で、目が点になっていた(であろう)私は、「これらを図書館にさしあげます。どうしても図録を作るのならこれらも入れたらいいでしょう」という、ほとんど信じがたい先生の声を聞いた。それからしばらく日数を経て、またお宅へうかがうと、「写本ばかりでなく、近世の西鶴本と馬琴の『南総里見八犬伝』の揃いもお持ちなさい」と、井原西鶴の浮世草子二十点余と桐箱に納められた『南総里見八犬伝』一揃とをくださるとのこと。この文章を書いている今でも、その時々を思い出すと、胸が高鳴り手に汗がにじむ。「私は名誉や謝礼がほしくてこうするのではなくて、大学のため後進のために役立てばそれで十分です」という、きわめて強いご意志により、大学からの謝礼の一切を辞退された先生の遺産が、今図書館にある。見事な図録が完成したことは言うまでもない。

その後、何とか先生のご意志にお報いしようとする、S部長の熱意と献身的なご尽力により、「特定コレクション目録」の作成と、並行して先生のご蔵書を数年間にわたり毎年少しずつ譲渡していただくことが決定された。「特定コレクション目録」は、『新編哲学堂文庫目録』(平成9年3月)『百人一首並びに類書目録』(平成10年3月)『古典文庫旧蔵書目録』(平成12年3月)の三部から成る。「まずは学祖井上円了博士が蒐集した蔵書を納める哲学堂文庫の目録を新たに作成すべき」という吉田先生のご助言もあり、これが手始めとなった。次いで、先生をはじめとした歴代国文学科の関係者が中心になって大学が蒐集したものに、先生から譲渡されたものを加えた百人一首関係文献の目録、最後に寄贈・譲渡を受けた先生の旧蔵書目録、という順序で作成されたのである。先生の旧蔵書は、先生の文庫名「古典文庫」に因んで、「古典文庫旧蔵書」と呼称されている。「個人名は出す必要がありません」という先生の強い願いによる。この旧蔵書は、今日その数をさらに増やし、またジャンル・内容も多岐にわたって、数百点に及ぶ日本古典文学の宝庫となっている。その具体的書目・内容については、前記図録と旧蔵書目録に詳しい。言うまでもないことではあるが、我々教職員・院生・学生は、これらを十分に活用しなければならない。実物を見ようではないか。旧蔵書目録の続編についても、その作成作業がすすめられている。

以上述べたようなことは、秘しておくべきことであるかもしれないし、迷惑に思われる向きもあるかもしれない。何よりも先生ご自身が本意とされることではあるまい。秋の彼岸を迎え、ご供養のつもりがつい筆がすべってしまった。

中山 尚夫 (なかやま ひさお)

文学部日本文学文化学科教授
専門: 日本近世文学
東洋大学大学院文学研究科国文学専攻
博士課程単位取得満期退学
著書: 『十返舎一九研究』(おうふう)、
『十返舎一九集』1~11(古典文庫)



東洋大学図書館所蔵 古典文庫旧蔵書紹介

西鶴本 浮世草子



西鶴諸国はなし（貴重書）

井原西鶴作 貞享2年（1685）1月刊

本作は、諸国の珍事奇談を題材に、35話の短編から成る。西鶴作品に多く見られる説話性の濃い、いわゆる雑話物浮世草子の代表的作品であり、また、序文に「人はばけもの世にないものはなし」とあるように、西鶴の持つ人間への関心が強く表れた作品でもある。本書は、大坂池田屋三良右衛門から出版された、雲形文紋淡鼠色表紙の美本で、初版初刷本と目される。同じ版元から出された毘沙門格子巻竜紋表紙本も存する。

南総里見八犬伝



南総里見八犬伝（貴重書）

滝沢馬琴作

文化11年（1814）～天保13年（1842）刊

八犬士をはじめとする多数の登場人物が複雑に交錯する長編の読本である本作は、徹底した勧善懲悪思想をもとにして書かれた。

作者馬琴の性格を反映するかの如く、几帳面に定型化されたストーリーと文章表現とは、読者の安心感も呼んで、多年にわたる出版物となり、近世を代表する文学作品となった。ベストセラーであるゆえに、重版本も多数出版されているが、本書はその初版本である。各輯表紙の意匠が異なり、それがほぼ完全な形で残っている稀本である。

以前イタリアのトスカナ地方の或る図書館で、カタログでやっと見つけ出した本を（昼休みを含めた）かなりの待ち時間ののちに（大英図書館の3倍以上とお考えください）、〈なぜか〉書庫にありませんでしたと言われたことがあります。カウンターの前で失望の色を隠せない私に、せっかく来たのだから、隣の画廊でも覗いてお帰りなさいとアドバイスがありました。その時たった1人でカウンターの仕事をしていた人は、名の知られた美術評論家であったことが後になってわかるのですが。

その時以来、イタリアでは、知り合いの先生に前もって本のことはお願いすることにしていました。今回、井上円了記念研究助成でグランド・ツアーをテーマに取り上げることになり、フィレンツェの図書館を訪ねることにしました。

世界中からの観光客を集める花の都、フィレンツェには小さなものまで含めると30にもものぼる数の図書館があります。ロムアルド・デル・ピアンコ財団のデル・ピアンコ氏がそのなかでも一番と折り紙をつけたのは、アルノ川を挟んで対岸にミケランジェロ広場を望む、フィレンツェ国立中央図書館（Biblioteca Nazionale Centrale Firenze）です。現在、正面入口は修復中のため、側面の通路が入口になっています。1747年以降、一般に開放されていますが、およそ550万冊の本、11万5千の定期刊行物、2万5千の写本、3700点のインキュナブラ（15世紀、印刷術が揺籃期の時代に印刷されたもの）、16世紀に出版されたもの2万9千点、自筆原稿100万点などを所蔵しています。カード式カタログと、コンピューターでの検索が可能です。階上の閲覧室の雰囲気はオックスフォードのボードリアン図書館の閲覧室と似ているように思いました。ここでくれぐれも注意されたのは、持ち物には十二分に気をつけるようにということでした。

次の日に訪ねたのはフィレンツェ国立文書館（Archivio di Stato di Firenze）です。装飾の美しい古い建物ではなく、周囲を囲った倉庫のような建物です。目録で目指す文書を見つけて閲覧用に出してきてもらうのですが、現代の行政・司法関係の公文書まで保管しているのも、ものによっては、（特に最近の、機密性の高いものなど）特別な許可が必要なものもあると聞きました。他の図書館と同じように、入館の際に荷物はロッカーに入れるのですが、コインを使うのではなく、イタリア式の3つの暗証番号を自分で設定して使うものが用いられています。

今回、初めての図書館にはデル・ピアンコ家の3人姉妹の1人が必ず案内役として同行していただきました。そのお蔭でスムーズに利用することができたと感謝しています。お父さんとは意見が違いますが、自分にとっての一番の場所はここよとカルロッタに案内してもらったのは、（石畳の狭い通りにある、これといって外観に特徴のない建物の）フィレンツェ市立図書館（Biblioteca Comunale Centrale）でした。中央図書館や文書館に比べて、若者の姿が多く、

リラックスした雰囲気を感じました。中央図書館と比べて、10分の1の蔵書しかありませんが、狭い閲覧室のすぐ外には、修道院でよく見かけられる中庭（ここでは小さな規模）を取り囲む回廊がありました。これまで、どれほど多くの人たちがフィレンツェの街の喧騒を離れて、ここで本を読み、静かに瞑想してきたのかしらとふと思いました。

斜塔で有名なピサの大学の図書館や、その昔フィレンツェへの海側の玄関の役目を果たした、港町リヴォルノの図書館と比べると、フィレンツェの図書館には、歴史の重みが色濃く感じられます。ルネッサンスの時代の空気が、街のあちらこちらにいまだに漂っているせいかもしれません。ドゥオモからウフィツィ美術館、ポンテ・ヴェッキオを渡ってピッティ宮へのルートには観光客が溢れています。裏の小さな路地も含めて街全体が美術館と言っても過言ではなく、見るべきものが様々あるフィレンツェの街で図書館にのみ眼を向けるのは、美味しいトラットリア、レストランテ、ジェラッテリアの前を通り過ぎるのにも似て、一種の修行者の精神が求められるののかもしれません。この次はもっと日程にゆとりが必要だと心から思いました。

最後に本屋さん事情に少し触れたいと思います。ロンドンなどと比べるとその数は少ないのですが、本屋さんの経営は大変なようです。探している本があったのですが、この地域での取り扱いはないから入手は困難とあっさり言われてしまいました。

インターネットの普及によって（ホームページの英語版はまだ限られています）、イタリアにおける本へのアクセスは図書館においても書店においても確かに簡便になりました。ただ、自由自在に使いこなせるようになるには、今も昔も時間がかかるようです。



ミケランジェロ広場から街を望む

近藤 裕子（こんどう ひろこ）

経済学部経済学科助教授 専門：18世紀イギリス文学

上智大学大学院文学研究科英米文学専攻

博士後期課程単位取得満期退学

（論文）「モンタギュー夫人のイタリア滞在」

“The Evolution of the Idea of NATURE in the Eighteenth Century” ほか

（ひとこと）自分の夢のために大いに図書館を活用して下さい。Ars longa, Vita brevis.